

今年も西濃運輸が都市対抗野球大会の出場を決め、大垣市は祝賀ムードに包まれています。

私が初めて西濃運輸本社を訪ねたのは、昭和55年の暮れでした。新春番組で創業者の田口利八氏にお話を伺うことになったからです。大実業家に一体どんな話を向ければよいのだろうか、糸口を掴みたい一心で資料を拝借にお邪魔しました。

用件が済み、玄関へ戻ると外は激しい雨。傘の持参がないことを察した受付の女性が「これをお持ちください。駐車場まで一緒致します」と和

田口利八翁の思い出

フリーランスアナウンサー 今尾ひな子

傘を渡してくださいました。こんな時のためでしょう。玄関に常備されているらしいのです。乗車の際に傘をさしていたおかげで私は濡れずすみましたが、雨粒の弾ける中で彼女には冷たい滴が落ちたことでしょう。申し訳ない気持ちや冬の寒さと裏腹に、温かい感触が広がりました。そうだ！この話をしよう。感動に勝る伝達力はありません。礼節を重んじる企業だと聞いていました。この体験はまさにそれです。

到着された利八翁に和傘をさしかけると満面の笑みです。録画前の控え室は和やかでした。こうしたゲストを迎えた折の打ち合わせは、話の自身の詳細には触れず雑談で空気を整えます。さて収録です。直前に「あなたの質問には、何でもお答えしますよ」と思わぬ言葉をいただきました。主題は「母を語る」。ひと月前に父親をおくった私に、利八翁のお話は格別、心に響きました。

